

### 米国と日本の学部教育におけるアスレティックトレーナー教育制度比較：Boise State University を例にして

泉, 重樹 / HAMMONS, Dave / IZUMI, Shigeki / ハモンズ, デイブ

---

(出版者 / Publisher)

法政大学スポーツ健康学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学スポーツ健康学研究 / 法政大学スポーツ健康学研究

(巻 / Volume)

7

(開始ページ / Start Page)

31

(終了ページ / End Page)

38

(発行年 / Year)

2016-03-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00013074>

[ 資料 ]

米国と日本の学部教育におけるアスレティックトレーナー教育制度比較  
— Boise State University を例にして —

**Differences in the education system for athletic training professionals  
between United States and Japan: A study at Boise State University.**

泉 重樹<sup>1)</sup>、デイブ ハモンズ<sup>2)</sup>

Shigeki Izumi, Dave Hammons

[ 要旨 ]

The purpose of this study is to present my 1-year experience of the Athletic Training Program (ATP) of Boise State University (BSU). I studied the components of ATP at BSU. I understood the education system by learning myself for ATP at BSU. The major characteristics of an athletic trainer certified professional are as follows: (1) the professional is an expert in the sports field in terms of first aid, and the position of the professional in sports medicine is established in the United States. (2) The ATC is a national qualification in the medical field in the United States. On the other hand, the Japanese athletic trainer (JASA-AT) is a sports leader qualification not a medical qualification, and differs from the ATC. (3) The perception of sports widely differs between Japan and the United States. Sports activities are regarded as extension of physical education in Japan. On the other hand, Sports are considered an entertainment in United States. Thus, the sports culture in Japan greatly differs from that in the United States.

キーワード : Athletic trainer、AT 教育、日本体育協会公認アスレティックトレーナー、  
National athletic-trainers' association

I はじめに

アスレティックトレーナー (Athletic Trainer 以下、AT) は現在、米国ではスポーツ現場においてアスリートのメディカルサポートになくなくてはならない職業として確立している<sup>1)</sup>。アメリカンフットボールとともに発達した AT の歴史は第二次世界大戦後の 1950 年には National Athletic Trainers' Association (以下、NATA) として組織化され、その後、資格認定制度も始まるなど歴史は古い<sup>2)</sup>。一方日本においては、あんまマッサージ指圧師や鍼灸師等がスポーツ現場において外傷・障害の治療や疲労回復等のアスリートをサポートする役割

を担ってきた歴史がある。日本で AT として制度化されたのは日本体育協会 (以下、日体協) のスポーツ指導者資格としてスタートした 1994 年であり<sup>2)</sup>、2015 年 10 月 1 日現在、2,623 名の日体協公認 AT<sup>3)</sup> が有資格者としてスポーツ現場を支えている。

筆者 (泉) は米国アイダホ州の州都ボイシ (Boise) にある Boise State University (以下、BSU) の Athletic Training Program<sup>4)</sup> (以下、ATP) に滞在し、2014 年 4 月 6 日より 2015 年 3 月 27 日まで研究活動を行った。BSU の ATP は NATA の資格認定組織である Board of Certification<sup>5)</sup> (以下、BOC) が認定する Certified Athletic Trainer (以下、ATC)

1) 法政大学スポーツ健康学部 (Faculty of Sports and Health Studies, Hosei University)

2) Boise State University

になるための教育プログラムである。さらにBSUのATPは、ATC教育の推進、教育内容および教育機関の認定組織であるCommission on Accreditation of Athletic Training Education<sup>6)</sup>(以下、CAATE)の認定を受けている。これらATCになるための教育制度は、前述した日本のAT(日体協公認AT)およびその教育制度を始める際に参考/模範にしたものである。筆者自身は日本で教育をうけ臨床活動を行っているATであり、現在は日本の大学でAT教育を行っている教員の一人であるが、米国で教育をうけた経験はない。しかしながらAT先進国である米国でのATC教育を実際に経験することで日本におけるAT教育に資することができると考えていた。

本研究の目的はBSUのATPにおいてATC教育およびATCと活動を共にした経験を報告するとともに、米国と日本とのスポーツの捉え方の相違点についても考察することである。

## II 方法

本研究はフィールドワークである。以下の2つの方法で行った内容を報告する。1. ATP所属学生とともに講義や実習といった授業を一緒に受けて経験したことを報告すること。2. ATP教育に直接かかわる全員ATCである4名の教員やAthletics(大学の体育会つまり運動部であると同時に大学の運動部全体を統括する組織)で働く常勤職員のATC(8名)に任意にインタビューを行い、筆者の疑問点を含め、ATPの教育体制や米国のATCの現状などについて話を伺ったことを1.とあわせてまとめることとした。

## III 結果および考察

### 1. ATPの教育課程・選抜・クラス人数等について

BSUのATPは3年制のプログラムである。入学後、1年次は日本でいう一般教養科目の科目を中心に単位を取得するが、Athletic Training関連の科目としてはテーピング実技やアスレティックトレーニング入門などの授業が学科生全体向けに開講されており、それらの科目を受けていることが

2年次より始まるATPを受験できる条件になっている。2年次になるときにATPに入るためには試験(それまでの成績評価(GPA)と面接試験)を受けて選抜される。ATPは大学の年次でいうと2年次から4年次までの3年間で展開されている。なかには他の学科や学部からATPに入るために転向してきた者もいる。しかしATPの選抜が許可された場合には必ずATPの1年次からスタートすることになり、3年間の教育期間が必要になる。実際に筆者が滞在している間にいた学生の中にも診療放射線技師課程からATPに転向してきた者がいた。

年齢はいわゆる学齢もしくはそれに近い年代が多い(と考えられる)が、30代、40代なかには50代の学生もいた。ATP学生の男女の割合は女性の方が多。2015年春学期現在の学生達の男女比は、ATP全体を通じて男性10名、女性26名の計36名で男性は約3割である。ATP教員の話では10年以上前までは男性7割、女性3割の比率だったとのことであるが、現在は男女比が1:1かやや女性が多いとのことであり、他の大学でも同じような傾向にあるとのことである。

1学年の人数は、BSUは最大で14名を目安にしているとのことである。ATP教員によるとBSUではATP教員が1人で授業を展開するため、実技系の授業が多いATPでは1人の教員で目が届く範囲ということではおおよそこのくらいが限界という話であった。また学生が2人組をつくって実技を伴う授業が多いため学生の人気は偶数になるように選抜しているとのことである。

BSUのATPは毎年30名程の申込者の中から15名以下に選抜されているそうである。ATPは必ず秋学期から始まり、春学期からの編入は認められていない。これは学外施設を含んでいる臨床実習への学生の割り振りを1年ごとに行うためとのことである。

### 2. ATPの授業内容と授業の様子について(図1,2)

ATPの講義方法自体は日本とほぼ変わらない。教員がホワイトボードを使いながら学生との対面

形式での講義である。ATPの教員が授業の本論に入る前に学生に必ず尋ねるのは、学生達が実習しているスポーツ現場で最近どのような怪我がみられたか、その怪我に対してATC達がどのように対応したのかということであった。これは講義にかかわる複数の教員が共通して行っていたことであった。ATCの業務が米国ではスポーツ現場での

応急処置等の緊急時の対応や急性期の怪我に対する対応を最重要視していることの表れであると考えられた。

2014年8月の4週目から始まった秋学期に見学していた授業の一つは、ATP1年次の学生に対するスポーツ外傷・障害に対する評価の授業であり、身体各部位ごとの解剖学の復習から外傷・障害そ



図1 ATP 2年次の実習授業の1コマ  
アイシングの実習を行っている。



図2 ATP 1年次の実習授業の1コマ  
評価の実習を行っている。

してその評価方法へと展開する授業であった。ATPで教えている内容は日本と同様であり、日米で差がみられるとは考えられなかった。もちろん使用する言語（日本語か英語か）の違いはあるが、学習する内容と到達目標自体は同様であると考えられた。もう一つはATP 2年次の学生に対するモダリティ（物理療法）の授業であった。寒冷療法、電気療法、超音波療法、光線療法などをそのメカニズムから詳しく解説し、使用方法の実習、そして試験へと進んでいた。この分野の授業は日本のAT教育では軽く触れられる程度であり、BSUのATPほどには行われていない。

2015年1月の2週目から始まった春学期には、引き続き上記ATP 1年次の外傷・障害に関する授業とATP 2年次のリハビリテーションの授業に参加した。後者のリハビリテーションの授業では期分けとしては医療機関や理学療法（以下、PT）クリニックにおけるリハビリテーションの初期からフィールドへ至るアスレティックリハビリテーションまで、内容は物理療法から各種運動療法までを、実技を交えながら授業自体が進められていった。運動療法の内容や各種エクササイズを行う時期、エクササイズの種類・方法やエクササイズの選び方という点では日本で行われている内容と変わらなかった。しかし日本では手技療法に分類される関節モビライゼーションやマッサージ、PNFテクニックなどの医療技術も、BSUのATPではその理論的背景から手技の方法までを講義と実技を通して行っており、この部分は日本のトレーナー教育のそれとは大きく異なっていた。ATCが米国では医療資格として教育されていることを実感する経験となった。

学生の授業への取り組み方は（少なくとも）本学よりもかなり必死な印象があった。つまりATP学生は例え出席をとらなくてもほぼ授業を休まない。学生の人数が少なく、試験が厳しいからとは考えられるものの、休む場合でも試合の帯同でないもしくは本当に病気であるかのいずれかで、事前に教員に報告するか、事前に話を聞いていた他の学生たちが教員に報告していた。少なくとも

私が授業に参加していた1年間は無断欠席する学生はいなかった。授業時間中は私語も全くなく、話を聞く態度はよいし、学生からの質問もとても多かった。カリキュラムの構成や授業の雰囲気自体は日本における医療系国家資格の専門学校のそれに近いと考えられた。

講義の形式としてATP教員が話していたことでもあるのだが、教師が一方向的に話す形の授業（日本では比較的多いと思われる）はほぼなかった。学生との双方向性のやり取りを教員が提供するだけでなく、学生も自身の意見をきちんと発言する姿勢が常に感じられた。日本との文化的な違いも大きいと考えるが、教員と学生の関係は、学生とファーストネームで呼び合う教員も多いなど、日本のような上下関係ではなく、フラットな友人関係のそれに近い印象である。また授業中、基本的に飲食は自由であり、椅子の上に脚を上げるなど、話を聞く姿勢という面では日本との文化の違いを実感した部分もあった。

### 3. ATP学生たちの臨床実習について（図3、4）

ATPに入った学生は、ATPの授業とともに、スポーツ現場を始めとする様々な現場での実習が義務付けられていた。1年次はプログラムへの入学が認められた8月より、8週間ずつ、①Boise周辺の高校、②BSUのフットボール、③理学療法（以下、PT）クリニック、④BSU内の他の運動部という上記4つのATCに関わることになるスポーツ現場および職場をローテーションするようにプログラムされているとのことであった。そしてこれらのスポーツ現場および医療現場には必ずATCがおり、ATP学生のみで現場に関わることはなかった。これはBSUのATPだけでなく、CAATEが認める全米のATCの教育プログラムでは現在このような体制で行われているとのことである。また臨床実習はATP学生である3年間は常に行い続けることが義務付けられていた。この点も日本のATの教育プログラムとの大きな違いである。そして学年が進みATPの2年次、3年次は主に半期ずつ、1つのスポーツを実習する形になっていた。これ



図3 ATCが活動しているトレーニングルーム1  
学内のアリーナにあるトレーニングルームである。



図4 ATCが活動しているトレーニングルーム2  
学内のアメリカンフットボール専用施設内にあるトレーニングルームである。

は各スポーツのシーズン毎に様々なスポーツを実習するという、BSUのATPの方針であり特徴でもあるとのことであった。

臨床実習時間はCAATEの方針で週20時間、各 Semesterで200時間が実習単位として認められる。この時間は最低限の時間であり、学生達の勉強や自身の時間を確保するために決められた指針

である。逆に言えばこのような指針ができるほど、ATCおよびATP学生は非常に多くの時間をスポーツ現場で実習として費やしている現状がある。同時にこれら実習時間の総量が守られていない現場が決して少なくない現状もある。BSUで最も人気を集め、観客動員数と同時に売り上げともに群を抜いて高いアメリカンフットボール（以下、フッ

トボール)部では、この週20時間という上限枠自体も厳密に守られている現状にはないようである。

BSUのAthleticsにある運動部には必ず専任のATCがいる。2014-15シーズンのAthleticsに所属するATCは専任職員であるATCが8名とATCでありGraduate Assistantとして運動部で働く大学院生が7名の計15名であった<sup>7)</sup>。これらのATC達がAthleticsにある運動部(男子7競技、女子11競技)のすべてを担当しており、これらのATCの下でATP学生たちが実習を行っていた。スポーツ現場におけるすべての急性外傷等に関する最初の評価および処置はこれら現場のATCが行うことになるので、スポーツ現場には練習・試合にかかわらず必ずATCが帯同していた。また仮に怪我人が出た場合、ATCが最初の評価を行った後に送る医療機関として学内にアイダホ州立の医療施設であるIdaho Sports Medicine Institute(以下、ISMI)があり、そちらにすぐに連絡ができるとともに怪我を負った選手を送れる体制になっていた。このISMIには4名の整形外科医と1名の内科医がおり、これらの医師が各運動部のチームドクターも兼ねていた。学内で練習や試合が行われる場合には学内にこのISMIがあることで素早い処置までが行える環境は、日本人からすると本当にうらやましく、素晴らしい環境であると考えられる。この環境はBSUが特別なのではなく米国、特にBSUが所属しているNational Collegiate Athletic Association(全米大学体育協会、以下、NCAA)のDivision1の大学ではこのような医療面で連携できる環境は当たり前とのことであった。

ATP学生たちはスポーツ現場では、選手達が練習中に飲む水を用意したり、現場に必要な医学的処置のための道具(担架や装具、テーピングなどが入ったバッグなど)を運んだり、トレーニングルームを掃除したりなどの雑用もすべて行う。選手に対するアスレティックリハビリテーション、リハビリを含むトレーニングの補助、急性の外傷などの応急処置といったトレーナーとしての主業務は、ATP学生たちはATCが行っているところと一緒に見ることはできるが、特に大学の運動部内

では前述の業務を自身の裁量のみでは行うことはできない。その逆にATがもともと少ない日本のスポーツ現場では、学生トレーナーだけでもスポーツ現場に帯同する部活動はまだましであり、ATがないスポーツ現場の方が当たり前なのが現状である。

ATの業務にはカルテ作成などの書類作成を含めた多くの業務があるが、それらの多くをATC同様にATP学生も担当することになる。BSUのフットボール部のようにATC自体が多くなおかつATP学生の実習生自体も多い現場では、特にATP1年目の学生は競技種目によっては実習期間中ずっと見学と雑用のみといっても過言ではない現状もあるため、ATCになろうとするモチベーションの低下につながる可能性もあるとATP教育にかかわる教員も考えている。

#### 4. ATP学生のドロップアウトとATC業務について

BSUのATPでは過去3年間のATP学生に関するデータを記録している。3年間の記録である理由は、3年前からプログラム自体が2年制から3年制へ変化したことによるとのことであった。学生数は2015年春学期現在、3年次13名、2年次8名、1年次14名である。各学年とも1年から2年へ進級するときに辞めた学生がいたようで、3年次が1名、2年次が3名それぞれATPを辞めている(もしくは落第している)とのことであった。2年次の3名のうち、1名は単に必修授業(化学)の単位が取得できず進級できなかったために脱落していた。他の2名は自主的な進路変更とのことであった。

ATPはこのプログラムへ入るための選抜試験があるため、ATPへの入学が許可されて以降は、自ら辞めていく学生は少ない。しかしながら様々な要因からATPからバーンアウトしてしまう学生が出てしまうこともある。これは担当教員も認めていた。スポーツ現場で職を得ているATCは米国でも花形であるが、一方では労働時間が長い割に、給料が決して高くないという現実にはNATAがATCに行っている調査<sup>8)</sup>からも明らかである為、問題

の根は深いと考えられる。ATP 教員が学生に行っている対策としては、選抜の時点できちんと ATP の情報を開示して、決して簡単なコースではないことと、最後には BOC の試験が必須であるため勉強も並行して行い続けなければならないことも念を押して伝えているとのことである。そして最も大事なのはやはり AT はスポーツ医学分野の中ではアスリートを支える花形の職業であり、アスリートと共にスポーツ現場で苦楽を共にできる素晴らしい職業であることを学生達に伝え続けることである。

#### IV まとめ

BSU の ATP を通して、米国の ATC 教育制度を経験することで、改めて米国のアスレティックトレーナーに対する認識を新たにすることができた。それは以下の 3 点に集約することができると考えている。

1. ATC はスポーツ現場における外傷等のスペシャリストである。理由は ATC の業務はスポーツ現場における急性期外傷や事故等の対応が、理学療法士との一番の違いであり、上記以外の業務は理学療法士でも行うことができるという資格の持つ背景による。

2. ATC は医療資格である。その為に教育制度設計は日本の医療系国家資格取得のための専門学校のそれに非常に近い。これは日本の AT (日本体育協会公認 AT) が、スポーツ指導者資格であることと比べる大きな違いである。ATC は医療従事者として教育が施されていた。

3. 日米のスポーツに対する考え方の違い、スポーツ文化の違いは大きい。日本は体育がまずあり、それからスポーツがあるという考え方が根強いと考えるが、米国ではスポーツは完全にエンターテインメントである。大学スポーツであっても選手はアマチュアであるが、選手を支えるスタッフすべてが有給のプロフェッショナルであった。

#### V 要約

本研究の目的は米国 Boise State University (以下、

BSU) の Athletic Training Program (以下、ATP) において Certified Athletic Trainer (以下、ATC) 教育および ATC 活動の経験を報告することであった。筆者は BSU の ATP に 1 年間滞在し研究活動を行った。結果、BSU の ATP を通して、米国の ATC 教育制度を経験することで、改めて米国のアスレティックトレーナーに対する認識を新たにすることができた。それは以下の通りである。1. ATC はスポーツ現場における救急対応時のスペシャリストである。そしてこの ATC の地位は米国では確立されている。2. ATC は医療資格である。その為に教育制度設計は日本の医療系国家資格取得のための専門学校のそれに非常に近い。これは日本の AT (日本体育協会公認 AT) が、スポーツ指導者資格であることと比べる大きな違いである。3. 日米のスポーツに対する考え方の違い、スポーツ文化の違いは大きい。日本は教育としての体育がまず存在し、そこからスポーツがあると考えられるが、米国ではスポーツは完全にエンターテインメントである。大学スポーツであっても選手はアマチュアであるが、選手を支えるスタッフすべてが有給のプロフェッショナルであった。このような日米のスポーツ文化の違いを実感できたことは大きな収穫であった。

#### VI 文献

- 1) National Athletic Trainers' Association: <http://www.nata.org/>. Accessed by 2015.12.28
- 2) 日本体育協会編: アスレティックトレーナー専門科目テキスト 1. 日本体育協会, 2010
- 3) 日本体育協会, 公認スポーツ指導者登録者数: <http://www.japan-sports.or.jp/coach/tabid/248/Default.aspx>. Accessed by 2015,12,28
- 4) Boise State University, ATHLETIC TRAINING PROGRAM: <http://hs.boisestate.edu/kinesiology/atp/>. Accessed by 2015.12.28
- 5) Board of Certification for Athletic Trainer: <http://www.bocatc.org/>. Accessed by 2015.12.28
- 6) Commission on Accreditation of Athletic Training Education: <http://caate.net/>. Accessed by

2015.12.28

- 7) Boise State Broncos, Boise State Sports Medicine: <http://www.broncosports.com/sports-med/atep-home.html>. Accessed by 2015.12.28
- 8) Sue Finkam: NATA Performs Survey of CIC ATCs. Athletic Therapy Today, 7(6), 60-61